

リトアニアにおけるホロコーストの記憶

The Memory of the Holocaust in Lithuania

橋本 信子*

Nobuko Hashimoto

リトアニア共和国における「負の遺産」「負の歴史」の現場および関連施設を訪れた。ドイツとソ連による二重の占領を経て、念願の独立を果たしたリトアニアの人々は、過去のどの時点を、どのように伝えようとしているか。記憶と歴史の伝え方について、日本との関係も交えて考察する。

キーワード：リトアニア、ホロコースト、負の遺産、杉原千畝、ポグロム

I. はじめに

本稿の目的は、リトアニア共和国における「負の遺産」「負の歴史」の現場および関連施設を紹介し、リトアニアの人々が、過去のどの時点を、どのように伝えようとしているかを考察することである。2016年、筆者はベルリンとプラハを訪ね、社会主義体制時代のいわゆる「秘密警察」関連施設の保存と社会教育活動への取り組みを紹介し、負の歴史の「現場」を訪れることで、場や現物が放つリアル感、空間の広さや距離感を直に感じとることの意義と作用について考察した¹⁾。

2017年8月はリトアニアの第2の都市カウナスと、首都ヴィリニウスを訪ねた。リトアニアはバルト三国の一番南にある、人口284.9万人²⁾の共和国である。カウナスは第二次世界大戦中の首都であり、日本領事館領事代理として赴任した外交官、杉原千畝(1900-1986)がいわゆる「命のビザ」を発給して、欧州の戦禍を逃れようとする人びと、主にポーランド系ユダヤ人やリトアニア系ユダヤ人数千人³⁾を救った場所として、近年日本でも知られつつある街である。ヴィリニウスは、「北のイェルサレム」と称されるほどのユダヤ人・ユダヤ教文化を築いた街である。しかし同時に、この二都市は、第二次世界大戦中、ユダヤ人虐殺(ポグロム)と、ナチスによるユダヤ人絶滅作戦(ホロコースト)の一大拠点にもなった。

ヴィリニウスにはユダヤ人が約6万人いたが、第二次世界大戦終了後の生存者は2~3千人、リトアニア全土では20万人のうち5千人ほどしか生き残ることができなかったという⁴⁾。つまり、リトアニアにおけるユダヤ人の死亡率は95%にものぼる。この数字は国別では最悪である。しかも虐殺にはナチの親衛隊に協力する現地のリトアニア住民が手を下していたという。

一方では世界で賞賛される人道的行為がなされ、他方ではユダヤ人に対するホロコーストが行

われた事実を、現在のリトアニアはどのように伝えようとしているのだろうか。カウナス、ヴィリニユスのホロコースト関連施設を紹介しつつ考察する。両市には他にも多くの社会教育施設や記念碑などがあるが、本稿では、負の歴史の「現場」を保存公開している施設に関する記述を中心にする。

なお、リトアニアはポーランド、ソ連、ドイツの占領下にあったため、それぞれの時期で地名の呼称が異なる。本稿では現在のリトアニアの取り組みを扱うため、現地で使われている呼称を用い、カタカナ表記は日本でなじんでいるものがあればそれを採用した。

関連年表

年	リトアニアの動き
1569	ポーランドと連合国家（二民族一共和国）
1795	第3次三国分割により大部分がロシア領となる。
1915	ドイツがリトアニアを占領。
1918	2月 独立を宣言。11月 ソヴィエト軍が侵攻。共産党がヴィリニユスで政権を樹立。リトアニア政府はカウナスを臨時の首都に。
1919	2月 ソヴィエト軍撤退。リトアニア共産党非合法に。民族主義が強まる。
1920	4月 ポーランドがヴィリニユスを占領。
1939	8月 独ソ不可侵条約 9月 ドイツがポーランドに侵攻、第二次世界大戦がはじまる 10月 ソ連との友好相互援助条約締結、ヴィリニユスが返還される。
1940	6月 ソ連の進駐、占拠。傀儡政権ができる。 8月 ソ連邦に編入される。 7～8月 杉原千畝がカウナス日本領事館で難民にビザを発給する。
1941	6月 独ソ開戦、ドイツ軍のリトアニア侵攻が始まる。ポグロム、ホロコーストの激化。
1945	1月 ドイツ軍、撤退。終戦。
1990	2月 共和国最高会議選挙。3月 独立回復宣言。
1991	9月 ソ連国家評議会バルト三共和国の国家独立に関する決定を採択。
2004	3月 NATO加盟。5月 EU加盟。

伊東他（1998）、志摩（2004）を基に筆者作成⁵⁾

I. カウナスにおけるホロコーストの記憶

1. 杉原記念館 Sugiharos Namai / Sugihara House（所在地 Vaižganto 30）

1939年に杉原千畝が開設し、1940年7月末から8月にかけて、主にポーランドからのユダヤ難

民に2139通の通過ビザを発給した⁶⁾元日本領事館の建物である。杉原とともに、同じく難民にオランダ領キュラソー島を最終目的地として認める旨の文書を発給したオランダ名誉領事ヤン・ツバルテンディクの功績を称える目的で開設された。当時、日本政府は、日本以外の第三国が最終目的地として確定していなければ通過ビザを発給しないという方針を採っていたため、このいわゆる「キュラソー・ビザ」なくして杉原が通過ビザを発給することはできなかった。そのため、後述する第9要塞やユダヤ博物館（グリーンハウス）においても、杉原とツバルテンディクの2人はセットで紹介されている。

日本領事館が閉鎖されたあと、この建物は共同住宅として使われていたが、1999年、リトアニアとベルギーの知識人や実業家が「杉原『命の外交官』基金」を創設、2000年に「杉原記念教育センター」を設立した。以来、この基金（NPO）が管理運営にあたっている。財源は寄付に依っている。同センターでは公開講座、討論会、教育プログラムを運営、市民社会および寛容の概念の保護の推進を担っている。ピタウタス・マグヌス大学との協力関係があり、日本研究センターと市民社会寛容センターも入居していた（現在は改装のため同大学のセンターは転居した）。

同基金では、2001年から「寛容の人（Person of Tolerance）」を選出している。「その行為によって公衆に模範を示し、外国人嫌い、反ユダヤ主義、異なる考えや教義をもつ人びと、外国人の迫害に対して懸念を表明したリトアニア人」が対象となる。

杉原記念館発行の小冊子（発行年不明だが、おそらく2010年）⁷⁾には、年間4千人が来館しているとあるが、2015年には1万3500人を記録、2016年はさらに増える見通しとの報道もあり、年々、知名度を上げているようである⁸⁾。

杉原記念館は、カウナスの目抜き通りの東の起点となる聖ミカエル教会から1キロあまり、徒歩で15～20分ほどの少し小高くなった住宅街にある。中心市街地から思いのほか近い。建物は日本の二世帯住宅くらいの大きさである。前庭はほとんどなく、建物の前はすぐ道路という感じである。連日何百人という人が押し寄せてきたときは、相当な圧迫感であっただろう。

日本語が堪能な受付の青年によれば、見学者はほとんどが日本人とのことである。ゲストブックの記帳もほとんどが日本語で、まれにヘブライ文字や英語が見られた。日本からは個人の見学者だけではなく、自治体や中高生が団体で平和学習、人権学習のツアーで訪れている。

筆者のカウナスでの5日ほどの滞在中、鉄道駅と、杉原がリトアニアを退去する直前に泊まっていたホテルメトロポリス以外で日本人を見かけることはなかったが、同館のゲストブックには間を置かず日本人の訪問が記録されている。筆者が同館にいた1時間ほどの間にも3組ほどが訪れていた。ほとんどの日本人観光客は「杉原詣で」を目的としてカウナスを訪れているのではないだろうか。

記念館の受付には、お土産ものも置いている。杉原やツバルテンディクの写真を用いたもの、領事館の公印をデザインしたりネン製品（リネンはリトアニアの特産である）など種類も多い。

質、デザインとも良く、価格もそこそこする。後述する諸施設には書籍のみか、施設の外観を刷った葉書やマグネット程度しか置いていなかったのに比べると、杉原記念館には商売気があるようにも見える。が、同館は人を助けこそすれ抑圧したり殺害したりした場ではないし、むしろ「聖地」のようなものである。「聖地」にはお土産はつきものだろう。なにより同館が国家からの援助を受けず寄付で賄っている施設であることを考えれば、民間の力だけで歴史的建造物を保存、活用する財源を自館で確保する例として参考になるだろう。



写真 1. 杉原記念館内部。かつての執務室を再現している。(2017/8/2 筆者撮影)

2017年9月1日から8日には、カウナスで第1回「杉原ウィーク」が開催される運びである。シンポジウムや写真展など、さまざまなイベントが予定されている。杉原千畝はリトアニアと日本を結ぶシンボルとなり、杉原記念館は両国の交流の拠点となっていると言ってよいだろう。

ここで、日本における杉原千畝の受容について簡単にまとめておく。杉原が日本で広く知られ

るようになったのは、イスラエルが彼に「諸国民の中の正義の人」賞を授与した1985年以降である。90年代に、杉原の出身地である岐阜県八百津町が彼の功績を讃える事業を展開する（1992年「人道の丘公園」開設、2000年「杉原千畝記念館」開館）。

千畝の妻、杉原幸子の著作『六千人の命のビザ』（大正出版、1993年）を筆頭に多数の書籍も刊行されている。研究者による公文書等の一次資料を引いた歴史的な観点からの著作もあれば、杉原の行為に感銘を受けた一般の人が彼の足跡をたどったり関係者に会ったり、先行する書籍を参照してまとめた随想的なもの、児童生徒向けの偉人伝などもある。小中高校の教科書でも取り上げられ、1992年、2005年にはテレビドラマ、2015年には映画もつくられた⁹⁾。筆者が杉原について学生に聞いたところ、高校までの授業で聞いた、テレビの情報番組や映画で知ったという声が挙がった。

社会教育施設における恒常的な展示としては、杉原の発給したビザを携えた難民が寄港した福井県敦賀市にある「人道の港敦賀ムゼウム」や、広島県福山市の民間施設である「ホロコースト記念館」に杉原を紹介するコーナーがある。企画展示は全国各地で多数開催されている。

さらには、杉原が1年間在籍した早稲田大学にレリーフが建てられ（2011年）、杉原が少年期を過ごした名古屋市には、杉原を顕彰する「杉原千畝人道の道」が設定された（2016年）。八百津町は「命のビザ」関連資料をユネスコの「世界の記憶」（「世界記憶遺産」から改称）にも登録申請したが、これは認められなかった¹⁰⁾。

これらの活発な動きは、杉原がなぜそのような行動をとるに至ったか、彼自身の生涯や思想的背景を知り時代背景を知ること、差別や戦争、人道的行為と職務命令との葛藤、法や倫理について考える機会を提供していると言える。

最近では「観光資源」として地域おこしに「活用」する動きも活発になっている。八百津町や高山市、白川村、敦賀市、金沢市と名古屋市（2017年4月に参加）は「杉原千畝ルート推進協議会」をつくりユダヤ人観光客誘致に励んでいる。効果は出ているようで、高山市に2016年に宿泊した外国人観光客は前年より約6万人増えた。伸び率が最大だったのはイスラエルからの観光客で、前年比の約2倍の約1万4900人であったという¹¹⁾。日本を訪れるイスラエル人客は年々増加していて、2016年は約2万9千人に達する見込みという。つまり、イスラエルからの観光客の約半数が「千畝ルート」周辺を訪ねていることになる¹²⁾。

2. カウナス第9要塞博物館 Kauno IX forto muziejus / Kaunas IX Fort Museum

（所在地 Žemaičių plentas 73）

杉原記念館がユダヤ人を救った現場であるならば、第9要塞はカウナスにおける最大のホロコースト現場である。

その名が示すとおり、ここはカウナスを防衛する9番目の要塞である。リトアニアがロシア帝

国の支配下にあった 1903 年に建設が始まり、1913 年に完成した総コンクリート造りの堅牢な建物である。地下にも回廊が張り巡らされ、電気や強制換気システムなど最先端の技術が用いられた。1915 年にソ連が退却したあとは一時ドイツが占領した。1918 年にリトアニアが独立したのちは懲役犯用の刑務所に利用される。このとき新たにレンガの壁が造られ、外部に面会室が設けられた。ここには刑事犯とともに政治犯も収容された。政治犯の大半は当時非合法であったリトアニア共産党員である。収容者は 74 ヘクタールの農地で農作業に従事した。この時期に植えられた果樹の一部は今も残っているという。

1940 年にリトアニアがソ連に併合されると、第 9 要塞は内務人民委員部（NKVD）の管轄のもと、カウナスとカウナス周辺の主に政治犯をソ連奥地の収容所に送る中継地として使われるようになる。

1941 年 6 月 22 日、独ソが開戦すると、25 日にはドイツ軍がカウナスを占領し、組織的なユダヤ人の殺戮が進行する。41 年 10 月から 44 年 8 月にかけてカウナス・ゲットーのユダヤ人が次々と連行され、老若男女問わず銃殺された。オーストリア、ポーランド、フランス、ソ連、ドイツから連れてこられた人々も殺害されている。第二次世界大戦中にここで 5 万人が殺されたとされる。

1943 年に戦況が危うくなるとドイツは大量虐殺の跡を隠滅する。囚人による特別部隊が、埋められていた遺体を掘り起こして焼却にあたった。彼らはこの作業に 1943 年 11 月まで従事した。43 年の 12 月 25 日に彼ら 64 人全員が要塞からの脱出に成功した。うち 11 人は大戦の終了まで生き延び、国際社会にナチスの第 9 要塞での殺戮行為を知らせた。第 9 要塞での大量虐殺は 44 年 8 月に再びソ連の赤軍が占領して終わった。

1958 年 7 月 9 日、革命史博物館が第 9 要塞内に設置され、59 年 5 月に最初の展覧会「リトアニアにおけるナチ犯罪」が要塞のなかの 4 つの監房で開催された。1960 年、大量虐殺に関する研究が始まる。66 年から 70 年にかけてコンペティションが行われ、13 年間をかけて要塞一帯が整備された。大量虐殺の現場には、高さ 32 メートルの巨大なモニュメントが建立された。第 9 要塞とは別に、博物館の新館が建設され、遊歩道が整備された。1984 年 6 月に一般公開された複合施設は 50 ヘクタールの敷地を持つ、ヨーロッパで最も大きな追悼の場所となっている¹³⁾。

さて、新しく造られた博物館の内部は、ステンドグラスが多用され、教会のようである（写真 2）。ステンドグラスの模様も彫像も宗教性は排しているが、祈りの空間の雰囲気がある。この館はソ連時代に建てられたものであるが、リトアニアに熱心なカトリック信者が多いことを反映しているのだろうか。



写真 2. カウナス第 9 要塞博物館新館内部。スタンドグラスや彫像などに特定の宗教のモチーフは使われていないが、全体的に教会のような雰囲気醸し出している。(2017/8/4 筆者撮影)

展示は主にパネルと写真である。囚人服や虐殺の犠牲者の遺品などもある。解説はリトアニア語と英語である。ソ連時代にできた博物館であるにもかかわらず、館内にはロシア語の解説が見当たらなかった。同館の公式サイトには、「1990 年にリトアニアが再び独立し、50 年間のソヴィエトによる占領についても自由な議論が可能になった。ナチだけでなく、1940-41 年にソ連が犯した罪についても語れるようになった。第 9 要塞のあらゆる時期の歴史について紹介する新しい展示がつけられた」とあるので、おそらくそのときにロシア語は一掃されたのだろう。

ところで、1991 年の独立後、リトアニアはソ連に編入されていた時期を「ソヴィエトによる占領」と表現する。この新館の名称も、Okupacijų Ekspozicijoje / The Exposition of Occupations であり、複数形の「占領」は、ソ連とドイツによる占領を意味している。

リトアニアには、ラトヴィアやエストニアのようなロシア系住民への処遇をめぐる深刻な問題はないと言われるが、いまでもリトアニアにはロシア人が人口の 5 パーセントを占めている¹⁴⁾。筆者の短い滞在の間でも、鉄道や郵便局や公共施設の窓口、街の通りでロシア語を耳にする機会は多かった。食料品などにはリトアニア語と並んでロシア語の表記がある。社会教育施設、それも

このようなテーマの歴史博物館でロシア語の解説文がないことをどう解釈すればよいだろうか。リトアニアのロシア系住民はリトアニア語の解説文を不自由なく読めるのか、ロシア語話者にリトアニア語ないしは英語を読むことを求めているのか、リトアニア語も英語も読めない来館者はごくわずかであると想定したのだろうか。

つづく第9要塞の建物の方は、当時の雰囲気を残して公開されている(写真3)。監房ごとにテーマを設けて、写真やパネル、現物を展示している。天井の厚みが1.5~2mあるという堅牢な建物だけあって、筆者が訪れた日は30度近くまで気温が上がっていたのに、屋内は冷え冷えとしていた。後日訪れたヴィリニユスの「ジェノサイドの犠牲者を記念する博物館」の地下にあるKGBの拘置所から比べれば、第9要塞の監房には窓があり、面積も広く、天井高もあるのだが、建物自体に厚みがあるからか、閉塞感や囚われている感覚を覚える。監房や廊下には大きな暖房装置が多数据えつけてあり、冬の寒さが想像できる。



写真 3. カウナス第9要塞博物館内部。監房ごとに展示の仕方が違う。この監房は当時の様子を残したものになっている。(2017/8/4 筆者撮影)

2 階の一室は、杉原千畝とヤン・ツバルテンディクをはじめとするユダヤ人を救出した外交官たちを紹介する部屋になっている。この部屋の展示物の大半は杉原に関する写真やパネルである。カウナスにおける杉原への評価の高さが見てとれる構成である。ただ、現物展示に関しては、この館の展示目的にはそぐわない日本人観光客の手土産のようなものもあった。日本とカウナスの交流は年々活発になり、杉原に関する研究も進んでいるので、今後、展示はさらに充実していくかもしれない。

横並びになっている 2 階の監房を進んでいくと、狭く曲がった廊下の先の奥まったところに、さらに一室、監房があった（写真 4）。いまはセミナールームにでも使っているのだろうか。壁には、児童か生徒が作成したと思われるポスターが貼ってあった。ポスターのテーマはホロコースト、アウシュヴィッツ、ブッヘンバルト強制収容所、カウナス第 9 要塞が 1 枚ずつ、アンネ・フランクが 4 枚である。これらのポスターがどこで、どのような活動において作成されたのかは特に書いていなかったが、入室に若干の躊躇を覚える位置にある監房を、あえて教育や研究の場として使用できるようにし、そこに若い世代への歴史教育、人権教育の成果物を貼っていることに軽い驚きを覚えた。「負の遺産」の現場保存と利活用の一つの形を見たように思う。



写真 4. カウナス第 9 要塞 2 階の最奥部。セミナーや会議の場として使われていると思われる監房。壁に児童か生徒の作成した学習ポスターが貼ってある。（2017/8/4 筆者撮影）

第9要塞を出て、ビル8階建てに相当する巨大なモニュメント（写真5）の方向に進むと、右手にプレートのかかった壁が現れる（写真6）。プレートには「この壁付近で、1943-44年、ナチは人々を撃ち、焼いた」と記されている。目を凝らすと弾痕を見てとることができる。

要塞を利用した強制収容所、5万人を銃殺した大量虐殺の現場は、いまはカウナスの街を臨む、整備された美しい緑の丘である。第9要塞の屋根はきれいに刈られた緑が覆いつくし、半分地中に埋もれたかのように周囲の丘と一体化している。要塞という言葉から想像するような威容を感じさせることはなく、広大な墓地、静かな祈りの場という感じである。筆者が訪れた日は青空が美しく、爽やかな風が吹き、実に心地よかった。なんの予備知識もなくこの場所に来れば、そのような凄惨なことが行われた場所とはまず思わないだろう。この感覚は、第Ⅲ章で紹介するパネライの森でも感じた。リトアニアの美意識、もしくは死生観にもとづくものなのであろうか。



写真5. カウナス第9要塞の虐殺を記念するモニュメントは高さ32メートルという巨大な建造物である。（2017/8/4 筆者撮影）



写真 6. カウナス第 9 要塞外部に残る銃殺の現場。壁には銃痕が見える。(2014/8/4 筆者撮影)

Ⅲ. ヴィリニウスのユダヤの記憶

リトアニアの首都ヴィリニウスの中心市街地は徒歩で回れる程度の広さである。ところが、その面積に比して、負の歴史を扱う博物館、施設は多い。このうちおそらくもっとも知られているのは、ジェノサイド博物館（通称 KGB 博物館）Genocido aukų muziejus / The Museum of Genocide Victims（所在地 Aukų 2A）であろう。ここはソ連時代、国家保安委員会（KGB）が使用していた建物で、地下の拘置所が当時のまま保存、公開されている。極端に狭い独房や処刑場なども入室できるようになっていて、狭く暗く空気が重い。1 階と 2 階はリトアニアにおけるジェノサイドに関する展示であるが、ユダヤ人に対する組織的殺戮に関する展示は少しであり¹⁵⁾、主たる展示はソ連による支配とそれに対する抵抗に関するものである。そのため本稿では同館の詳細は省く。リトアニアにおける「ジェノサイド」の解釈とそれに対する批判についてはⅣ章であらためて述べる。

ヴィリニウスでユダヤ関連の展示を見ることができるのは、ヴィリニウスのガオン国立ユダヤ博物館 Valstybinis Vilniaus Gaono žydų muziejus (VVGŽM) / the Vilna Gaon State Jewish Museum（以下、ユダヤ博物館と略）の諸施設である。同館は、ユダヤ人に関する総合的な博物館であり、ホロコーストに限定せず、広くリトアニアにおいてユダヤ人が生み出した文化や芸術作品を扱う。

そのため、本章のタイトルは「ホロコーストの記憶」ではなく「ユダヤの記憶」とした。

同館の施設のうち、主要なものは3つある。ホロコースト展示館（通称グリーンハウス）、寛容センター、パネライ・メモリアルである。ユダヤ博物館の前身は1913年にユダヤ人コミュニティが創設した。1920年のポーランドによるヴィリニウス占領に伴うカウナス遷都の際には活動拠点をカウナスに移した。1940年、リトアニアがソ連に併合されると、博物館はリトアニア・ソヴィエト科学アカデミーの管轄下に入る。第二次世界大戦が勃発し、ドイツがリトアニアを占領した際には、ナチによって所蔵品が収奪されるが、ユダヤ人コミュニティは一部を隠し持って収奪から守った。

1944年夏、戦争が終結すると、ホロコーストを生き延びたユダヤ人たちが再び首都となったヴィリニウスに博物館を再建する。はじめは個人の住居の一室から始まり、そののち、かつてのゲッソーの図書館および文化センターの役割を果たしていた建物に収奪を免れた文書や美術品を集め始める。しかし、ユダヤの文化に価値を見いださないソ連当局に破棄されたり古紙業者に回されたりしたものもあったという。

1949年にユダヤ博物館はヴィリニウス歴史博物館に組み込まれ、事実上廃止される。このとき、ユダヤ博物館の収蔵品は多数の博物館や文化施設に分配されてしまう。以後、リトアニアにおけるユダヤ人に関する記憶は、パネライ・メモリアルとカウナス第9要塞においてホロコーストの犠牲者として記されるにとどまることになった。ユダヤ人の歴史や文化的遺産は50年間、消し去られたかのような状態が続いたのである。

1980年代後半、ペレストロイカの進行で事態は変化する。1989年9月6日、政府の第177決議により、ユダヤ博物館の再開が認められる。リトアニア共和国独立後の1991年2月13日には、政府決議第56号によって、戦後接収された収蔵物をユダヤ博物館に返還することが決まる。1997年には、「ヴィリニウスのガオン（賢人）」と呼ばれた傑出したタルムード（ユダヤ律法）学者（Eliyahu ben Shlomo Zalman 1720-97）の没後200年を記念して、名称を現在のものに変更した。

2009年から14年にかけて3館を訪れた児童生徒の団体は700、約12,500人にのぼる。この数字は通常の博物館展示の見学のみであり、映画上映や討論会などのイベント行事への参加は含まない¹⁶⁾。

1. ホロコースト展示館（通称グリーンハウス） VVGŽM Holokausto ekspozicija（所在地 Pamėnkalnio 12）

古い木造の一軒家を改装した緑色の小ぶりの博物館である。かつてリトアニア共産党が非合法の結成大会を開いた場所として知られるこの建物は1989年に一時的な施設として博物館に提供された。1991年にホロコーストの生存者による初めての展覧会が開かれた。

現在は、リトアニアにおけるユダヤ人の歴史や文化、ホロコーストと抵抗の歴史を写真とパネ

ルで展示している。個人住宅かと思う小さな博物館だが、展示の密度は濃い。2011年には包括的な図録を発行している¹⁷⁾。この小さな建物に年間6千人が来館するという¹⁸⁾。筆者が訪れた際も多くの来館者で、どの部屋も埋まっていた。手狭になってきたため、かつて博物館があったゲットー図書館跡に移設する計画が進んでいる。

2. 寛容センター VVGŽM Tolerancijos centras / The Tolerance Center (所在地 Naugarduko 10)

1893年に貧しいユダヤ人のためのスープキッチン（給食施設）が設けられた建物である。1910年に増築される時にはオーケストラのための劇場も造られた。2002年に改築し、ユダヤ文化を伝える教育・研究のためのセンターになった¹⁹⁾。バリアフリーに配慮し、現代的な設備を整えた広々とした空間になっている。リトアニアのユダヤ人による絵画やユダヤ教の道具などを展示しているコーナーと、ホロコーストを生き延びた子どもたちに関するコーナーがある。2階の展示室はホールと繋がっていて、ホールは3階までの吹き抜けになっている。ホールは講演やコンサートなどさまざまな文化活動に使われている。展示物も悲惨なものではなく、開放感のある施設である。年間6千人以上の来館があるとのことであるが²⁰⁾、筆者が滞在した1時間ほどの間には、ほかに来館者は見かけなかった。

3. パネライ・メモリアル VVGŽM Panerių memorialinis muziejus / Memorial Museum of Paneriai (所在地 Agastų 15)

パネライの森は、第二次世界大戦前まではヴィリニウス近辺の住民がレクリエーションに行く人気の場所であったという。1939年、ソ連の赤軍が燃料タンクと弾薬の貯蔵施設をこの森に造る。41年、ヴィリニウスに侵攻したドイツは、未完成だった燃料タンクを据えるための7つの巨大な穴を見つけ、ここを大量虐殺の場所に使う。1944年8月、ソ連の調査団は、この森で約10万人が殺害されたと断じた。現在では、ユダヤ人が約6万人のほか、リトアニア兵士、ロマ人、ポーランドの抵抗組織、カトリック司祭、ソ連軍捕虜、地域住民などを合わせて、計7万人が殺されたとされている²¹⁾。

1945年6月に、ホロコースト生存者のユダヤ人によって記念碑が建立されるが、52年にソ連当局によって破壊され、「すべてのファシズム犠牲者の記念碑」に替えられる。60年には、博物館がヴィリニウス地方博物館の分館として開設された。85年に新しい博物館が建てられ、展示が一新する。このとき一帯も整備された。91年にはユダヤ博物館の一部になった。ソ連時代の碑にはリトアニア語とロシア語の碑文しかなかったが、現在はユダヤ人の使用したイディッシュ語やヘブライ語の碑が立っている。現在、パネライ・メモリアルを新しいコンセプトで整備する計画が進んでいるという²²⁾。

パネライはヴィリニウスからは10キロほど、鉄道では一駅、11分ほどで到着する。当時、犠牲者たちはヴィリニウスから歩かされたり、ときにはトラックや鉄道で連れてこられたりしたという²³⁾。パネライ駅周辺はがらんとした緑地で、バレーボールのコートや木のテーブルとベンチがある。向かいには納屋と庭を備えた木造住宅がゆったりと並び、小さなスーパーマーケットもある。右手に線路、左手に住宅を見ながら、幅は広いが車も人もほとんど通らない一本道を少し歩くと、森に入る。駅から1.1キロ、13分ほど歩くと Panerių Memorialas と記した大きな碑が現れる。そこは駐車場になっていて、その先に教会を思わせるシルエットの小さな博物館がある。案内の青年がきれいな英語で質問があればどうぞと声をかけてきた。

博物館の入場や現場の見学は無料である。筆者が滞在している1時間ほどの間には、車で来た見学者2組ほどを見かけた。博物館は面積的にはかなり小さいが、展示パネルがぎっしりと壁を覆っていて見応えがある。独自のパンフレットなどはなかったため、メモリアル地図のパネルを写真に撮って、それを確認しながら歩いて回った。

森に連れてこられた人々は、衣類を脱ぐよう強制され、穴の縁に立たされる。背後から撃たれた人々は穴に落ちる。穴は死体で埋まっていく。のちに、証拠隠滅のために、連行したユダヤ人に人々の遺体を掘り起こさせて焼却したという。証言によれば、初期に使った穴には2万4千人が埋められていたという²⁴⁾。

現在は、穴のあった場所はそれとわかるようにコンクリートで縁取りしてはいるが、少しえぐれている程度で、深さはほとんどない(写真7)。緑が茂っていて円形の花壇のようである。柵で囲んでいるわけでもなく、シンプルな石の説明板が設置されているだけである。周囲の木々や穴をめぐる道もよく整備されていて、おどろおどろしい雰囲気はまったくない。

メモリアル内にある数基の記念碑に花や写真が供えられていたり、ユダヤ人の習慣である石が積まれていたりすることで、かろうじて整備された墓地に來たような感覚を持つが、大量殺戮が行われた場所に立っているとは到底思えなかった。筆者が訪れた日はとりわけ抜けるような青空で、爽やかささえ感じたのである。当時撮影されたモノクロ写真を見ると陰鬱な雰囲気しか感じないが、その頃も空の青や木々の緑が鮮やかな清々しい日が当然あったわけである。この爽やかな空と空気のなかでも人間は想像を絶する残虐な行為をしてしまえるのだ。

そこでなされた行為についての知識を仕入れて現場を訪れても、それを感じさせない現在の様子とのギャップをどうとらえればよいだろう。悲劇の現場をどのような形で残せばよいのか。恐怖を喚起しなくてはいけないのだろうか。いや墓地がそうであるように静寂と祈りだけで良いのかもしれない。訪問以来、ずっとそのようなことを思いめぐらしている。



写真 7. パネリアイ・メモリアルに残る虐殺の現場の一つ。深い穴に銃殺された人々が埋められた。(2017/8/4 筆者撮影)

IV. リトアニアにおける歴史の見直し

ヴィリニユスのユダヤ博物館 3 施設ではいずれも入場の際に係員からどこから来たのかをまず尋ねられ、質問や案内が必要であれば手助けすると言われた。おそらく 3 館共通の方針として徹底しているのだろう。いずれの館も対応がていねいで、積極的に歴史や文化を伝えたいという意思を感じた。

第 9 要塞やジェノサイド博物館においても、歴史を伝え、歴史について考えさせる教育機関としての機能を果たしている様子が見てとれた。第 9 要塞に子どもの作成したポスターが展示していたのは前述の通りだが、ジェノサイド博物館の外部にも小学生から中学生くらいと思われる子どもたちの絵が多数展示してあった（写真 8, 9）。1990 年のソ連からの独立の際の象徴であるテレビ塔での衝突、ホロコーストの様子、アンネ・フランク、隠れ家などをテーマにした絵である。なかでも、「自由」というフレーズが書き込まれたものが多かったことは、リトアニアにおける歴史でもっとも重視されるテーマが、「占領」と「抵抗」と「独立」にあることを象徴している。



写真 8, 9. ヴィリニユスのジェノサイド博物館横に展示された子どもたちの絵。占領、ホロコースト、抵抗、独立を題材にしたものが並んでいる。(2017/8/6 筆者撮影)

1990年の独立後、リトアニアがソ連体制を「占領」とみなし、ソヴィエトによる抑圧を「ジェノサイド」と定義して追及する姿勢には、ユダヤ人に対するホロコーストを相対化し、同等のレベルに下げるものだという批判があるという。

本稿で見てきたように、いままたリトアニアでは、ユダヤ人文化やホロコーストを伝える動きが活発になっている。毎年9月22日には、パネリアイの森で追悼式典が開かれ、議会、文化省、外務省の代表、ヴィリニウス市長、ユダヤ人コミュニティの代表、外交官たちが花を捧げている。ユダヤ人の虐殺を記念する日に制定された9月23日²⁵⁾には、ホロコーストからユダヤ人を救った住民に、大統領が「ライフセーバー勲章」を授与している。1994年から2004年で1297人が受章したという。また、リトアニアからは881人がイスラエルの「諸国民の中の正義の人」賞を授与されている。たしかにリトアニアにも、自らの命を賭してユダヤ人を助けた人が多数いたのである。

しかし、ホロコーストに積極的に関与、協力したリトアニア人もまた多数いたのは厳然たる事実である。その追及が不十分であるという批判もある²⁶⁾。

例えば、ナチによる組織的なジェノサイドが開始される直前の1941年6月27日にカウナスのヴィータウタス Vytautas 大通りに面したリエトゥーキス Lietūkis 馬車置き場で起こったボグロムについては、いまだ解明されていない点が多い。大通りに面した場所で、白昼堂々、60人とも70人ともいわれるユダヤ人にリトアニア人がリンチを加えて殺害したのである。長時間に渡った凶行を街の人々が見物している写真が残っている。見物者のなかには子どもを連れた女性もいたという。ユダヤ人コミュニティは毎年この事件前後のボグロムの犠牲者を追悼する式典を開いているが、記念碑は事件の現場ではない、奥まった通りのスポーツ施設の中庭に設置されている（所在地 Miško 1）。2015年の式典にはイスラエル大使が出席したが、リトアニア政府関係者の出席はなかったという²⁷⁾。

最後にまた日本に話を戻したい。筆者はリトアニアに発つ直前の2017年7月29日に、福山市のホロコースト記念館に講演会を聴きに行った。ちょうど杉原が発給したビザでアメリカに逃れた女性の娘と孫娘である3人の女性が来館されており、聴衆に紹介された。一通のビザが人命を救い、次の世代へと命を繋いだことを目の当たりにする機会を得たのである。このときに来ていた地元の児童や生徒にとっては、歴史学習、平和学習が現実と結びつく貴重な経験となっただろう。必ずしも杉原に縁のない土地であっても、その功績を知らしめ伝える場所があることで思索や交流や話し合いが生まれる機会が創出される。そのことを実感することができた。

とはいえ、杉原千敏という個人を英雄視し、日本人の誇りだと讃えているだけでよいのか。観光資源として消費していくだけでよいのかという問題意識も持ちたい。私たちの生きる今このときも世界中に行き場を失っている人々、困難な状況にある人々がいる。70余年前の特殊な状況にあった特別な人の特別な行為として礼賛するだけでなく、私たち自身がなすべきこと、できるこ

とは何かを考え、行動するべきであろう。

引用文献、注

- 1) 橋本信子：「負の遺産」をどう伝えるか：旧東独のシュタージ（国家保安省）関連施設の事例『流通科学大学論集 人間・社会・自然編』, 29 (2), (2017), 101-116.
- 2) 日本外務省「リトアニア基礎データ」より 2017 年 1 月時点の統計。
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/lithuania/data.html> (2017/8/29 最終確認)
- 3) 通説では杉原の発給したビザで助かった人々は 6 千人といわれることが多いが、正確な数字はわかっていない。杉原がカウナスで発給したと日本の外務省に報告した通過ビザのリストに挙がっている人数は 2139 人である。杉原の妻、杉原幸子の回想録によれば、途中から番号をつけなくなったという。『六千人の命のビザ』（大正出版, 1993 年）40. 一通のビザが家族にも適用されることがあったため、2139 人よりも多いことは確かなようだが、外交史料館の白石仁章は、家族への適用にしては多いのではないかと指摘する。『杉原千畝 情報に賭けた外交官』（新潮社 2015）203-208. なお、杉原ビザを得た人々はソ連を横断し、船で敦賀に上陸し、神戸や横浜で態勢を整えて第三国に移住していった。敦賀や神戸は空襲によって資料を焼失したため、完全な記録は残っていないが、大半のユダヤ難民を受け入れた神戸で調査が進みつつある。岩田隆義「神戸とユダヤ難民」『神戸の歴史 神戸開港 150 年記念』第 26 号、2017.7.
- 4) ユダヤ人の犠牲者の概数は、The European Holocaust Research Infrastructure (EHRI) に依った。
<https://www.ehri-project.eu/vilna-gaon-state-jewish-museum> (2017/8/28 最終確認)
- 5) 伊東孝之・井内敏夫・中井和夫編：『ポーランド・ウクライナ・バルト史』（山川出版社, 1998）志摩園子：『物語 バルト三国の歴史』（中央公論新社, 2004）.
- 6) 杉原が発給した通過ビザの一覧表は「杉原千畝記念館」（岐阜県八百津町）の HP で見ることができる。
http://www.sugihara-museum.jp/shared/pdf/about/issued_list.pdf (2017/8/29 最終確認)
- 7) 『杉原ハウス：過去と現在の間で』の記載による。この小冊子には発行年が記載されていないが、巻頭言のビザ発給 70 周年を記念してという文言から判断すると 2010 年発行と思われる。
- 8) ‘Record Number of Japanese Tourists Visit Kaunas in 2016’ (2016/12/28)
<http://visit.kaunas.lt/en/kaunastic/record-number-of-japanese-tourists-visit-kaunas-in-2016/> (2017/9/2 最終確認)
- 9) ドラマは、加藤剛、秋吉久美子主演「命のビザ 六千人のユダヤ人を救った日本領事の決断」（1992 年）、反町隆史、飯島直子主演「日本のシンドラ 杉原千畝物語 六千人の命のビザ」（2005 年）。チェリン・グラック監督、唐沢寿明、小雪主演による映画「杉原千畝 SUGIHARA CHIUNE」（2015 年）は、カウナスの中心地にある歴史あるロムヴァ Romuva 劇場でプレミア上映され、地元住民の喝采を浴びたという。東宝ウェブサイト 2015 年 10 月 22 日記事「杉原千畝 スギハラチウネ」リトアニアにてワールドプレミア上映実施 唐沢寿明&小雪が旧日本領事館を訪問
https://www.toho.co.jp/movie/news/1510/08sugihara_wp.html (2017/8/29 最終確認)
- 10) 中日新聞 2017 年 11 月 1 日記事「命のビザ、顕彰続ける 杉原リスト「世界の記憶」逃す」
<http://www.chunichi.co.jp/article/gifu/20171101/CK2017110102000019.html> (2017/11/6 最終確認)
- 11) 朝日新聞 2017 年 1 月 5 日記事「外国人観光客宿泊、高山で最多 42 万人 昨年「千畝ルート」定着も」
- 12) 朝日新聞 2017 年 2 月 9 日記事「「千畝ルート」人気 増えるイスラエル客 出身地など 5 市町村」
- 13) 以上の沿革は第 9 要塞のホームページとパンフレットを参照した。The Ninth Fort of Kaunas Fortress - Kauno

- IX forto muziejus <http://www.9fortomuziejus.lt/istorija/kauno-tvirtoves-ix-fortas/?lang=en> (2017/8/27 最終確認)
- 14) 2015 年リトアニア統計局に基づく。DTAC 観光情報局
http://www.dtac.jp/baltic_eeurope/lithuania/data.php (2017/9/2 最終確認)。
- 15) 同館が発行している図録では 2 ページのみにとどまる。The Museum of Genocide Victims A Guide to the Exhibitions (Genocide and Resistance Research Center of Lithuania, Vilnius, 2006) , 30-31.
- 16) 以上のユダヤ国立ユダヤ博物館の 3 つの館の沿革については、同館公式サイトを参照。
<http://www.jmuseum.lt/index.aspx?Element=ViewArticle&TopicID=6> (2017/8/29 最終確認)
- 17) Catalogue of the Holocaust Exhibition (Vilna Gaon State Jewish Museum, Vilnius, 2011)
- 18) グリーンハウスの沿革と来館者数については、The European Holocaust Research Infrastructure (EHRI) による。<https://www.ehri-project.eu/vilna-gaon-state-jewish-museum> (2017/8/28 最終確認)
- 19) Irena Guzenberg: Vilnius Sites of Jewish Memory (Pavilniai Publishers, Vilnius, 2013) , p.75.
- 20) 来館者数については、The European Holocaust Research Infrastructure (EHRI) による。
<https://www.ehri-project.eu/vilna-gaon-state-jewish-museum> (2017/8/28 最終確認)
- 21) 殺害された人々の数の出典は、注 15 に同じ。
- 22) The European Holocaust Research Infrastructure (EHRI) の HP 内
<https://www.ehri-project.eu/vilna-gaon-state-jewish-museum> (2017/8/28 最終確認)
- 23) Joseph Levinson (ed.) : The Shoah (Holocaust) in Lithuania, (The Vilna Gaon Jewish State Museum, Vilnius, 2006) p.48
- 24) クロード・ランズマン (高橋武智訳) : 『SHOAH (ショアー)』 (作品社、1995) 46-49, 52.
- 25) 1943 年のこの日、ナチはヴィリニウスのゲットーを破壊し、残っていたユダヤ人をパネライの森で殺害するか、ポーランドやエストニアの強制収容所に連行した。
- 26) 1990 年代以降のリトアニアの歴史認識や研究の動向については、野村真理「自国史の検証 リトアニアにおけるホロコーストの記憶をめぐって」、野村真理・弁納オー編『地域統合と人的移動』(御茶の水書房、2006)、重松尚「リトアニアにおける「ジェノサイド」：その言説の系譜と国内法における定義」『ロシア・ユーラシアの経済と社会』994 (2015) , 31-45、梶さやか「リトアニア ナショナリズムと「西側的」国際協調」『ロシア・ユーラシアの経済と社会』1005 (2016) , 36-40 を参照。
- 27) Julius Norwilla: “The June 2015 Memorial for the Lietūkis Garage Massacre in Kaunas, Lithuania” , Defending History, 2 July 2015, <http://defendinghistory.com/the-june-2015-memorial-for-the-lietukis-garage-massacre/74966> (2017/8/25 最終確認)

付記：本研究は、2017 年度流通科学大学特別研究費（研究課題名「初年次教育と専門教育を架橋する中間教育構想——国際理解能力育成の視点から」）の助成を受けた研究成果の一部である。